

ローカル（地域）という概念は一般にナショナル（国家）やグローバル（世界）という概念に対比して低位もしくは一部であると理解されている。ローカル放送局は全国に一二九局あり、キー局の中継以外に独自の番組を放送して人気があるが、伝達範囲は一定の地域に限定されている。ローカル政党も政治活動の範囲が特定の地域に制約されている。

しかし最近、ローカルが評価されるようになってきている。一例がローカル鉄道である。岩手の三陸海岸の久慈から盛まで一六三キロの鉄道を最短でも四時間三〇分かけて走行する「三陸鉄道」は沿線の絶景の効果もあり人気の路線であるし、北海道の釧路湿原の周辺を釧路から網走まで一六六キロを走行する「釧網本線」も人気である。

日本のローカルな食事も農林水産省の応援もあり、郷土料理として人々を地域に誘引する資源になっている。愛知の「きしめん」は筆者の子供時代の粗食の代表であったが郷土料理に格上げされているし、新潟では日常の食事であった「へぎそば」も文化庁が全国から三〇〇件を選定した一〇〇年フードになっている。

このようなローカルの潮流に後押しされて注目されつつあるのがローカル新聞である。特定の地域を対象にした新聞で、都道府県内部のみで流通する地方紙と、それより狭域で流通する地域紙が該当する。調査によると、オンラインで提供する新聞を除外したローカル新聞は全国に一三三紙が存在している。

各紙の発行部数は全国紙と比較すれば桁違いに少数であるが、地域での占有比率は高率で、二〇二三年の調査では、鳥取では「日本海新聞」が五六％、福井では「福井新聞」が五四％、石川では「北國新聞」が五四％、島根では「山陰中央新報」が五三％、徳島では「徳島新聞」が四九％の家庭で購読され、全国紙を圧倒している。

しかし、新聞は転機に直面しつつある。江戸初期の瓦版を嚆矢として新聞には四〇〇年以上の歴史があり、順調に発行部数は増加してきたが、一九九七年の約五四〇〇万部を頂点に最近では半数の約二六〇万部に減少している。インターネットやスマートフォンなど新規の情報伝達媒体の浸透が影響していることは確実である。

しかし、前述したローカル新聞の地域での占有比率が明示しているように、新聞の将来は地域に存在する。それぞれの地域の放送も地域の情報を伝達するが、たまたま放送される時間に視聴していなければ受信できない。新聞であれば情報を入手する時間を自分で設定できるし、過去の情報を検索できる機能もある。

情報には相反する二種の特性がある。第一は機密情報という言葉が象徴するように入手している人間が少数であるほど価値が増大する特性、第二は放送の人気番組や書籍のベストセラーのように入手している人間が多数であるほど価値が増大する特性である。この相反する特性が混合しているところに情報社会の意味がある。

ローカル新聞やローカル放送は両者の微妙な混合を背景に成立している。全国という範囲では地域にしか存在しない情報の提供に意義があり、地域という範囲では第二の特性が期待されている。多数のローカル新聞とローカル放送が維持されている日本は、そのような意味で理想のバランスのある情報社会を形成しており、これが維持されることを期待したい。